



大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成16年
1月号

毎月23日発行
通巻401号

(題字 矢追日聖)

★発行日 平成16年1月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷製
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★振替口座 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



白山御前峰(ごぜんがみね)の日の出 福井市 齋藤正宏さん撮影 (H15. 9. 29)

昭和55(1980)年初め頃の座談会から

大倭紫陽花邑に住んで(5)

「前進友の会」の皆さんを迎えて

大倭会館にて

行政の施設をつくる

二十年以上前のことですが、精神障害者や医療者の共同生活を目ざしているというグループが、大倭に来られた時の録音からまとめています。 編集部

法主 大倭の福祉施設の場合は、昭和三十年からつくり出して、三十一年から発足しているんですね。これは生活保護法による救護施設で、奈良県下ではここが初めてです。

それまでは私個人で、いろんなハンディを持っていて人とか、いろんな事情の人を受け入れていたんです。その頃はホンマに共同生活でした。二つ屋根の下で、ずらーと枕並べて寝ているから、子供が夜にトイレへ行く時も、頭蹴るし腹踏むし、そんな生活だったんです。経済事情も悪かったしねえ。

社会福祉協議会とか県の人達は、私がついていって人達を救済するという目的でやっているのを見ていましたから、「先生、慈善事業みたいにするのはもう時代遅れです。国もその方向で進んでいて、生活保護法で予算を組んで面倒をみる方法を考えています。来る人が多くなったら経済的な負担も大きくなるし、行政の施設としてつくられたらどうですか。そうすれば、世話さえしていただいたらいいんですから」と、喧しく言ってきたんです。私も気が楽だし、本人にもそっちの方がよいだらうということ、救護施設を

ますけれど、帳簿上は、余所から来ている人も家の人間も同じようにきちんと処理していますよ。家の者の場合、給料は一つ財布の会計の方へ流れて、個人では貰っていませんけれど。

印刷の内容については、私自身はほとんど指示していませんよ。自分達で研究してやっていくんです。今ではかなり高度な印刷もやっていくていきますしね。何か知らんけれども自然の動きというのか、みんな考えて、いいように何とかやってきていますよ。私はホンマにその点は関わりありませんね。

そのままの自分でいられる場

法主 大倭に来て一年経たない大滝君が今日ここにいますが、今の心境を聞いていただけたらと思いますよ。大倭をどのようにとらえているのか私には知りませんがね。

杉本 どうして大倭へ来たのか、その動機を言うたら、それが今日の話としては参考になるんとかうか。

大滝哲也 僕はここへ来る前は、実は学校へもろくに通わないで、家族とも口を聞かないで、ほとんど自分の部屋の中でじーっとしていたんです。毎日本を読んだり、ぼけーっと考え事をしていくような生活でした。ご飯も家族と一緒に食べないで一人で部屋の中で食べて、家族が自分達の部屋に行ってから、こそこそと下へ降りていって食べ物をあさってみたりして、そんな酷い生活だったんです。それが三年間ほど続いてくると、だんだんやつぱり飽きてくるのか……。このまま家にいたら自分はもう駄目になるんじゃないかと思っただけです。それで病院のケースワーカーの方に相談したら大倭のことを紹介してくださった

んです。それまでもどこかに行ってみたらどうかという薦めは山ほどあったんですが、どうしても「うん」と言えなくて、みんな断わってしまったんですね。けれど、おそらく余程自分でも切羽詰っていたと思うんです、大倭の時には、「ハイ、行きます」と言っていたんです。

それまでの僕は、人とともに口をきいたり出来なくて——だから今こうして話しているのがまったく想像もつかなかったんですが——人と一緒に寝起きをしたり、ご飯を食べたりというのが、全然自分には出来ないんだと決めつけていたんです。だから大倭へ行っても、おそらく一週間も生活できないんじゃないかと思ってはいたんですが、杉本さんから逆療法と言われて、人と一緒にの部屋になつての生活で、畑仕事なんかを青山日元さんや他の方と一緒に毎日やってきたんです。そしたらまったく不思議なんですけれども、ガラッと自分が変わってしまった……。僕の話せることというのは、まあそれだけです。

法主 しかしなあ、別に頭が狂っているのと違うんや。どんなことでそうなったのか分からんけれど、三年間も親と一緒に家で生活して口をきかんというの、大変な努力やと私は思うよ。(笑)

そうかといって、別にここでは治療もなし、この子にはどうしたらええという考えもないし、ただ一緒に生活していたというだけやからねえ。それで何か知らんけれども変わってきたんやねえ。塚崎 今はずつとここで暮らしていきたいと思っておられるのですか？

大滝 ハイ。一生というわけではなくて、これから学校へ行こうと思ってるんですけど、その間はここにしようかと、それぐらいの目途でいます。法主 最近、「学校へ行きたい」と言い出してね。「ああ、それなら行つたらいいよ」と。

塚崎 これまでのいろんな人間関係と全然違うというか、そういう感じはありましたか？

大滝 やつぱり自分が変わったという感じしかないですね。大倭に来る前もいろんな方と接触していましたが、やつぱり自分が変わって、それで関係も変わってきたというような感じがします。

女性B あまり認めたくないけれど、自分の嫌なところってあるでしょう。私の場合は、一生懸命考えた結果、やつぱりそれを認めないとかかんないかと思っただけです。なかなか認められないんですけど、それを認めたぐらいから比較的自分元気になつてきたように思います。

そういうのとは、また違いますか？

大滝 ここに来て、一つ大きく変わったのは、物をあんまり考えなくなつたんです。ここに来る前は、理屈ばかり言っていて何一つ出来ないような人間だったんです。まったく逆とは言えませんが、それがかなり逆の方に向いてきたという気がするんです。それがホントに変わったところだと思います。だから自分で考えて変わったというよりも、やつぱり環境によって、ここに来て自分が変わって、それで人間関係も変わったと、そんな感じですね。

女性A 私がここに来て感じるの、非常に気持ちがいいのか、あんまり身構えなくていい、そのままの自分でいれたいという感じがあつて、多分、どの人もみんなそうだからじゃないかなあと思うんですけれどね。だから一生懸命自分のことを考えて自分が変わるといふのではなくて、自分をそのまま受け入れてくれる場だから、それで自分が変わっていくというふうに感じますね。法主 まあ、人間関係の中で我が一人なんぼ考えでも通用せんわなあ。お互いに気楽にいた方が楽やもんねえ。(続く)

年集 新特

あなたにとっての探しものは

何ですか？

△到着順▽

● 岸和田市——溝口 省吾

私にとつての探し物は、きわめて形而上的なものです。私の能力では、いかなる言もその意を尽くす能わずと言った類の、曰く言いがたきものです。同時に、言い難きものではあるが、しかし、はつきりと実在する心の世界です。

私は長いこと、何かに突き動かされて彷徨ってきました。かろうじて何かにつかまろうとする度に、私を突き崩そうと手が出てくるのです。意識の底から、私の人生を狂わせる力が働くのです。現実の生の手ごろな地点で根を下ろし、意識の底を何かで塞いで後は知らん顔、わかりやすい普通の人生にしたい。幾度もそう願いました。しかし、どうもがいても、意識の底にある何かが、私の安定しかけた人生をリセットするのです。

私は、高校・大学と世に言うエリートコースを歩んでいました。しかしわけのわからない力に徐々に征服され、大学を卒業する頃の我が人生は、何の具体的な希望も計画も見出せない、がらくたの寄せ集めのようなものになってしまいました。私はやがて、地上に彷徨う本当の旅に、自分の身をおきました。いまいましたことにそういう方向に無理やり押し出されたのです。私はひたすら神が自分の魂を宇宙から抹消してくれることだけを願って、あちこちを放浪しました。その数年間は、不徳の限りを尽くしました。

しかしそんな旅の中で、不可思議な世界を垣間見る経験を、ちよこちよこするようになり、やが

て電撃的な経験をするようになりました。

地上を吹き抜ける一陣の風の中に、ひらりとまわって落ちる木の葉一枚の中に、靈妙なる神の言葉を感じする境地。天の頂から地上につづく壮大な因果の連鎖が見える世界。日の光から来る神の無尽の愛に、思わずわが魂の消滅を危惧するような境地。すべてのものが自分の一部であり、自分がすべてと全く同一であると疑う余地のない世界。人の思うことが、我が身のことであるかのよう、話す前から流れ込んでくる世界。いかなる苦しみや混乱があろうとも、自分の生きているこの世界が、実は神の愛だけで成立していたと知った境地。つまり、われわれすべてが神そのものであり、神の世界は本当にすぐ近くにあり、我を罵倒するものも賛美するものも等しく皆、いとおい。そんな世界が、自分の中に現れたのです。人生の激変です。

その世界は、今は私と一定の距離を置いて実在しているようです。まだまだ、まだまだ、しかしいつの日か、その世界と常性的に合体したい。そして、私の意識の底をかき回す方々とも、軋轢なくむすびあう方向で、生きてゆきたい。大倭は、そういう私を静かに支えてくれる場所です。

遠き空 輝く光り見ながらも

今日のひとつの道に迷へる
言わば、私の探し求めるものは、その光りです。

● 大倭町——杉本姫縫重

このお便りをいただいて、自分なりに考えまし

たが（考えすぎて頭の中で一周した感があります）、この問いに対する私の答えは「探しものはありません」です。

「自分が探さなければならぬものは何なのか」がまだ分かりません。目の前にやるべきことが多すぎて、そんなことを改めて考える余裕もありません。「今やるべきこと」を一つ一つ確実にこなして、私自身の「軸」がしっかりできてから「私の探しもの」を探しに行きたいと思えます。

軸の基礎が出来上がる私なりの予定である数年後に、もう一度同じテーマでお便りください。ああ、でも数年たつても現在と全然変わってなかつたらどうしよう……（笑）。日々精進？

● 東京都渋谷区——山崎 寿々

「あなたにとつての探しものは何でしょう」との命題を受けまして、「自分にとつての探しものは？」と自分に問えば、「歩む道は決まっている」と応えるばかりです。この世に生き、そしてこの世を去る日迄、その歩み方の探究は続き、更に次の世に往つても窮りなく続くことは自明のこと、歩むべき道は決まっています。「事天の一途」です。けれどこの一途が容易でありませぬ。事毎に探しつづけています。祈りつつ、学びつつ……。

十四、五歳の時「人は何のために生きるのか？」「何のために勉強するのか？」の疑問をもちました。が、はからずも突然環境の変化に遇い（父の急死）、月日は慌しく過ぎました。けれど日々は奇しき御縁の連なりでありました。今にして思えば真に神の恵み、導きと信じています。爾来私の歩む道は「事天の一途」と、如何なる時も動じませんが、どう考え、どう為すべきか探し求めている日々であります。

奈良市——吉澤 弘行

「あなたにとつて探しているもの」というテーマで考えてみました。自分自身、小・中・高迄は自分が何をしたいのかが判らず、自分の目標というものを探そうと悩んだ時期もありました。

そして色々仕事もしましたが、なかなか納得のできる仕事が見つからずに『意味の無い日々』を送っている様に感じ、イライラしていた時期もありました。そんな時に縁があり、義母が私を美術商の道へと誘ってくれました。

デスクに座って毎日同じ仕事を繰り返すと言う事が向かない私にとつて、この仕事は大阪・神戸・京都・奈良等の道具市場に向き、色々な美術作品を見て・覚えて・買って・売って・損をすることもあれば、儲かる事もある、という様に日々の生活が自分自身にかかっている、言わば自分が社長みたいなものだと考えると、今までの仕事とは違い、いつも自分に『気合』が入っている様に感じます。

仕事を始めて一年がアツという間に経ち、やはりこの一年は充実感があつたと思います。この美術商という職を自分の『天職』だとつくづく思う中で、今自分が探しているものと言うテーマに対し、探していたものになってしまいかもしれませんが、思いつくのは今回取り上げました『天職（美術商）』の事だと思えます。

これからは自分で店を持つという目標や、家族を養うなど目標だらけで、自分なりに充実した毎日が送れそうです。

最後に、現在仕事上、古い蔵・茶道具等のいまだ出会った事の無いような物の買取を探しております。（笑）

京田辺市——鈴木啓三郎

「お年寄りの笑顔、ほほえみ」

介護サービスを提供させていただいて本当に良かったと思います。人生の先輩として、お年寄りが生きる目標を持ち、笑顔でほほえんでいただくと、心より嬉しく、人の温かい心を感じます。

大倭町——山崎安裕美

「あなたにとつての探しものは何ですか」このテーマをいただいた時、『私の探しものつて？』探しものを探している状態かも」という事ぐらいしか浮かびませんでした。じっくり考えてみたら、結構悩んでしまうものですね。

探しものと言えるかどうかはわかりませんが、最近ふと考えるのは、なぜ『ここ』に生まれてきたのかという事です。今までそんな事を考えることはあまりなかったのですが、この数ヶ月の間に私の周りで行くいろいろな出来事があり、『私の存在意味』というか『なぜ大倭に縁があつたのかな』なんて事を考える事があります。考えたり、探したりしたからといって見つかるものではないのですが、気になるところです。

九歳で大倭に引越しをしてきて、約二十年になります。長かったような短かったような。何気なく皆の中で暮らしてきたけれど、生活の中に法主様の教えがあつたように思います。大人と言われる人種になってからは、毎日の生活が忙しくて、忘れていくわけではないけれど見落としてしまっている部分がたくさんあります。

私が生まれた時に、法主様は「男の子として生まれてきたらよかつたな」と仰しゃつたそうです。その真意ははっきりと伺っていませんが、私が男の子ではなく女の子として生まれてきた事や、大

倭の地に縁あつて生まれてきたという事に何か意味があつたら良いなと思つています。そしてその意味が私の探しものです。

奈良市——五十嵐翰孺美

この題をもらつて一瞬ドキリとした。久々に新鮮な驚きである。私にとつて何だろう？ 咄嗟に答が浮かばない。

では、私は今まで何をしていたのであろうか。今、六十六歳。人並に主人について来て、それなりの経験を積ませてもらった。丁度五年前前であつたか、不思議な縁で「能」に出合い、その豊かな世界に魅せられ、すばらしい先生方や先輩の皆様に出合い、私自身お話し、お仕舞いを習っている。そんな中、やはりこのすばらしい幽玄の世界を大成された世阿弥様のことが気になり、今では世阿弥様の終焉の地は何処なのか、お墓は？ 出来れば訪ねてみたいと思つている。でも、これが私の探しものすべてではない。いつも心のどこかで何かを探していることも事実である。昔、私がまだ小さかつた頃、父から聞いた和歌があつた。

「年毎に咲くや吉野の桜花
樹を割りて見よ 花のありかを」

不勉強な私は誰の作なのかも知らないが、何となくその花のありかを探し求めているのではないかと思う。私もまた、自分のまわりに、心の中に美しい花をたくさん咲かせたいと願っているように思えてならない。

大倭町——山崎奈紀佐

今回この文章を考えるまで、特に何かを意識して探しているつもりはありませんでした。なので何を書いたら良いのかかなり悩みました。改めて

私が探しているものは何だろうと考えていた頃、仕事での人間関係で悩むことがあったのですが、その時に法主様の「みんな仲良くせえよ」という言葉が思い出されました。

もちろん人間誰しも気の合う人、合わない人というのはあると思います。

私は、ほんの少しお互いに想い合って接して、「お願いします」とか「ありがとう」などの一言を添えることで気持ちよく付き合っていくことができるのではないかと思いつつ、つい我を通してしまったり、一度『この人は苦手』と思ってしまるとなかなかその人を理解しようと思えなかつたりしてしまいます。

そこで、私がこれから探していくものは、『どうすればみんな仲良くできるのか?』と『どうすればみんなが仲良くできるのか?』ということかなと思います。

● 奈良市——中島 武宣

私が最近見つけた探しもの(者?)は、やはり嫁さんですね。

私も今年三十歳になりますが、自分でも「やっとなやな」という感じです。家庭もやっとな落ち着き、毎日帰りを迎えてくれる人がいるという喜びが非常にいいですね。(今のところは……)

思い出してみると、学生の頃は「探しもの」がたくさんありました。おそらく自信が持てなかつたんだと思います。

社会人になって見つけたものは多々あります。「社会の厳しさ」「仕事の厳しさ」「人とのコミュニケーション」「小さな幸せ」「心のゆとり」。

まだまだ見つかっていないものはあります。でも最近は、「無理に見つけようとしなくてもいい」と思うようになりました。しかるべき時に

見つかるものだと思うようになりました。見逃さないようにしたいです。

● 京都市——飯沼 二郎

私にとつての探しものは「おおやまと」に毎号あるように、やさしい人の心です。日本はあまりにも人の心が殺伐としています。

(京大名誉教授)

● 舞鶴市——藤本 宏秋(編集部)

テーマを与えられて、すっかり考えこんでしまった。「♪探しものは何ですか?」で始まる歌詞、井上陽水の『夢の中へ』しか思い浮かばないのだ。見つけるどころか、探す対象がないという状態。

もう少し前、二十代の頃なら、「自分にとつての天職とは何だろう?」とか、「自分とは、いったい何者なんだ?」とか、自分探しという事を中心に右往左往していることを書いていたかもしれないけれど。

そこで、「いつ頃からこんな心境になって来たんだろう?」と、つらつらと思い返してみる。もちろん、いつ頃からというハッキリとした日があるものでもない。ただ、大倭とご縁が出来てからというもの、そして親会に参加する度に、悩み事の一つ一つを、心の中から削り取って来たようなそんな気がする。否、というよりも、悩みと想っていた物事を、今世での宿題、自分を磨くための課題であると、何時の間にか、自然と思えるようになって来たのかもしれない。

法主さんは、「命は生涯の足跡にあらわれる」と言っておられる。神ながらの大道を踏み外さぬよう、自己本霊の声なき声に耳を澄ませながら、何でもないような日常の暮らしを今年も心豊かに営んで行きたいと思っている。そうすれば臨終の

時、探してさえいなかった探しものが、フツと目の前に現われるかもしれないから……。

● 大倭町——矢追 明昌(編集部)

継続して探しているものは仕事関係中心で記事として全然面白くありませんので、それ以外で最近一番探した記憶のあるものといえば、実はゴルフボールです(笑)。近くに奈良国際ゴルフ場があるので状況はよく理解してもらえるとと思いますが、へたくそが打ったボールというのはとんでもないところに飛んで行きます。しかも、平坦なコースならまだしも、山あり谷あり林ありのコースになると、それはもうキャディーさんがいないと数本のクラブを持ったままずーっとランニング状態です。大体四人一組で回るので、ほかのメンバーに迷惑をかけないようにしないといけないし、後からの組が上手なところだと、回り方も早いので更に気を遣います。

と書いてきましたが、私がゴルフコースへ行く頻度は年に数回ですし、打ちっぱなしへ行くのもそれに合わせてクラブの握り方を思い出しに行く程度です。練習すらしないのですからうまくならないのも当たり前ですね。探し物は努力しないと見つからないのと同じように、練習に行かなければ当分私の探し物の第一位は、ゴルフボールということ固定されたままになりそうです。

● 福井市——齋藤 正宏(編集部)

大倭を足繁く訪れるようになったのは、教務本庁が建つ前後、三年あまり前からのことと思う。その頻度も今では、月一回四日程度、年間通算で一月半にも及ぶことを考えると、ちと恐ろしいような気がする。

その表向きは?目的は、法主さんの遺された音

声テープや映像資料等を、皆が活用できる形にすることのお手伝いなのだけれど、私自身にとつては、より個人的なミソギとしての意味合いが濃いように思う。

生前の法主さんともお会いする機会をいただいでおりながら、自分をさらけ出して、素のままでお会いさせていただくことができなかった私である。そのことはまた、私が、自身の命ともチグハグな関係であることを意味している。そのことが哀しいのだ。

ところで大倭に来ていた時以外の私はというと、難病で寝たきりの父と、痴呆の進んだ祖父の世話と交代で行いながら、コンピュータ関連の内職と、名もない小さな塾を営むという生活を送っている（父が入院し、祖母が施設に入所した現在は、以前よりずっと楽な暮らしである）。

私にとつての「探しもの」というか、求め続けているものとは、この両方の暮らしを行き来することのなかで、心静かに自分を見つめ続けること、大倭流にいうならば、自己本霊との二人三脚の感度を磨いてゆくこと、のようである。

奈良市——中村千久佐（編集部）

私にとつての探しもの、それは自分の心探しです。毎日のようなことを思つて、考え、行動できているのか？ということですね。

日常、たくさんの人に色々教えられますが、このようなときでも素直に聞けない自分がいて、心は何を思っているんだろう？

ただ、いつも心で思っているのは、『人に優しく、誰とでも仲良く』ということなのに、なかなか実行できない自分がいるのです。少しずつでもその思いは努力していくつもりですが。

私を優しく見守ってくれる親、兄弟、一番の理

解者である夫、子どもには最低でも迷惑のかけない自分でありたいと願う。そして優しく思いやりのある心になるよう培って行きたいと思います。

大倭町——李 章根（編集部）

僕の探しものは平安です。何ものにも振り回されず、いろんな人々との関係を保ちながら、気楽に生きていけるような自分を創っていきたくと思う。経験不足の事もあつて、あつちになぶつかりこつちにひつかりするが、それらの経験は自己を相対化していく材料につかいたい。

法主さんの教えと今の仕事である漢方医療の追求を通して、平安の道を探求する。

年始にテレビで、日産を立て直したカルロス・ゴーン氏が、「安定があるというのは幻想である」と言っていた。自然界も身体も四季の巡りの中で変化し続けている、当たり前の日常の内に常に動いてやまぬものに僕の心はついてゆけるかなあ。

じだまことだま

中島 健様
神戸市 上野 允 士

過日いただいた喪中の通知にびっくりしました。十月二十日といえば、あの会合（賑栄塾）の翌日のことでしたし、健さんとお話ししていても康治さんの名前も出ませんでしたし、一体何があつたのだろうと思つていました。

その後、『おおよまと』が届き、それから、その後（岸田）哲さんからも電話をいただき、事故のことなど概略を知りました。

中島康治さんについては、私にはひとつの思い出があります。

それは、これもまた三十年近くも前のことにな

りますが、私が大倭出ることをみなさんにお伝えした後の思い出です。

大倭紫陽花邑には、「来る者は拒まず、去る者は追わず」という気風のようなものがあります。私が大倭を去る際にもこれを感じました。「そうか、行くのか。気が向いたら、またここに遊びに来たらいい」。私が交わつた邑の人々の反応は、大方、このようなものでした。

しかし、康治さんだけが違いました。彼は私に「大倭に残れよ」と言い、「いつしよにここでやつていこう」と言つてくれました。それは意外でもあり、私の胸に刻まれたひとつでもありました。

私が「意外だった」と言うのは、私が大倭にお世話になった半年のあいだに、私と康治さんのあいだで、何か記憶に残るような対話をしたとか、いつしよに仕事をしたとかいう「交わりの機会」が一度もなかったからです。

杉本さんが「康治君は言葉で聞く人ではなく、気で聞く人であった」という意味のことを書いていますが、あらためて私の記憶をたどつてみると、同感できる指摘でした。たとえば食堂などで、私は毎日のように康治さんと顔を合わせていたはずですが、康治さんの発したままとまった「言葉の記憶」がほとんどありません。親しく接した人、という印象も持つてはいませんでした。

それだけに余計、康治さんのひとつとは意外であり、私の心に染みこんでいったのだと思います。『おおよまと』十一月号の「寸沙」と杉本さんの「康治君、また会いたいね」で、私は康治さんについて多くのことを教えていただきました。

私の知らないことばかりでした。私のささやかな思い出をお伝えして、弔辞とさせていただきます。平成十五年十一月三十日

あじさい日記

12月14日 大倭の元旦である日聖祭(冬至の明るる日)を前に大倭墓地と紫陽花邑内で大倭会、FIWC、邑人の皆さんにより清掃祓ぎが行われました。

12月15日 大倭神宮月次祭。

12月22日 大倭神宮や拝殿、邑の入口に、門松や新しい注連縄で新年の準備が整いました。

青森の高橋末子さんが来邑、25日まで滞在。

12月23日 大倭60年の日聖祭。草創時の法主様の野良着(写真右)、妙月かあさんの自作の教服(同中)、鈴月かあさんの使いこまれた教服(同左)が展示され、大倭の原点への思いを新たにしました。



午後は、直会演芸会。「和やかで良かった。今年の目玉は李章根・林修三さんの漫才。皆さんの来年の挑戦が楽しみです」と中島武宣実行委員の話でした。

12月28日 大倭神宮の大掃除。枯れた竹を切り出す作業が多かったのですが、今年は参加者も増え、午前中で終了しました。

12月30日 餅つき神事。今年もFIWCの若い人達が助っ人で、最後に「時の旅人」のコーラスも聞かせてくれ、楽しい時間が生まれました。

佐渡の平田弘之・緑夫妻と5人の子供さん全員で来邑、京都大原の順徳帝御陵参拝と併せてとのこと。年始祭に女性達は和服で決めて参拝されました。

12月31日 夜11時半から拝殿の太太鼓を、邑の若者やFIWCのキャンパー達で三六五回打ち鳴らして一年の禍事を祓い清めました。今年初めて太鼓を鳴らした小学生の緊張ぶりがほほえましかった。

東京八王子市の春日作太郎さん来邑、1月5日まで滞在。

1月1日 邑内各所へお参りして挨拶の後、大倭神宮で年始祭が行われました。

1月5日 午前11時から、拝殿で大倭殖産(株)・大倭印刷(株)と大倭大本宮、大倭安宿苑の代表が参加して年始め式が行われました。年男・年女の挨拶に、昇ちゃんも飛び入り(年末から横須賀の弟さん宅へ帰省して、この朝戻る)。

1月6日 大倭神宮月次祭。夜、大倭会館で恒例となつている邑人達の新年の集いが鍋を囲んで行われました。

大倭安宿苑では

12月18日 奈良パークホテルで職員年末懇親会。各施設職員の歌や踊りで盛り上がりました。

(菅原園)

1月1日 33回目の創立記念日。先月から仮設棟での生活が始まつていて、2カ所に分かれての新年祝賀会となりました。

(須加宮祭)

12月25日 サンタクロース姿の生駒施設長と寺井副施設長からプレゼントもあつた忘年会。

(長曾根祭)

12月21日 クリスマス会を劇やダンスで楽しみました。

(八重垣園)

12月24日 俳句の会。「大和路の峠の茶店葛湯かな」「あじさいの邑は静かに歳暮るる」

法主帰幽祭のご案内

日時 平成十六年二月九日(月)

午後二時より

場所 大倭大本宮拝殿

現身はよしとつるとも永久に
結ぶ心のかわるものは
日 聖

大倭教立教開宣を大倭元年として、今年は大倭六十年に当たります。法主様は常々、ご利益信仰をいじめ、盲信する心に警鐘をならされました。宗教を心の糧とするためには大切な教えでしょう。

あんない

* 玉緒祭(大本宮)
2月3日(火) 午後2時より
大倭大本宮拝殿にて。

玉緒祭は宇宙根本神靈と人間の本霊との結びを感じ取るお祭り。玉は命を、緒はひもを言う。

* 月次祭(大倭神宮)
2月6日(金) 午後2時より
大倭神宮にて。

* 大倭会主催第四二三回祓会
2月8日(日) 午後2時より
大倭大本宮拝殿にて。

* 法主帰幽祭
2月9日(月) 午後2時より
大倭大本宮拝殿にて。

* 月次祭(大倭神宮)
2月15日(日) 午後2時より
大倭神宮にて。

* 申孝祭と月次祭(大本宮)
2月23日(月) 午後1時より
大倭神宮にて申孝祭が、2時より大倭大本宮拝殿にて月次祭が行われます。

申孝祭について詳しくは、『やわらぎの黙示』の「日本精神の源流—長曾根邑のすめらみこと」や『とおやまと』の平成元年3月号等を読みたい。

神武天皇が即位四年後、大倭神宮のある場所です「大孝を申べ」られた故事を記念して、大倭教では報恩感謝のお祭りとしてされている。大倭神宮には「金鶏靈時鳥見山中聖蹟」の碑がある。